



Title	<資料> 飯伊婦人文庫の歩み－調査記録－
Author(s)	吉田, 五十鈴; 小林, 正子; 久保田, 雅子 他
Citation	社会教育研究, 25, 79-112
Issue Date	2007-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/20401
Type	departmental bulletin paper
File Information	79-ad.edu25.pdf



<資料>

飯伊婦人文庫の歩み

－調査記録－

吉田 五十鈴・小林 正子
久保田 雅子・塩沢 信子

インタビュー記録：飯伊婦人文庫の歩み

はじめに

以下は、2006年8月3日に行われた飯伊婦人文庫の方々へのインタビューの記録である。現在は閉店している喫茶店「ベル」にて約3時間近くお話を伺った。参加者は以下の通りである(敬称略)。

飯伊婦人文庫：吉田五十鈴・久保田雅子・塩沢信子・小林正子
学生：池澤奈緒・長田みずほ・玉手千尋・千田明希子・根深忠大
院生：榊ひとみ・杉山晋平
飯田市職員：木下巨一
教員：宮崎隆志・武田るい子(清泉女子短大)

飯伊婦人文庫の方々とお会いするまでの、私たちの事情については、文末の拙文をご参照頂きたい。そこでも言及したが、飯伊婦人文庫の活動については既に山梨あや氏が日本社会教育学会紀要において分析されており、また当事者による分析も公刊されている。このインタビューは学術的な意図に基づくものではないが、活動に関わって来られた方々の思いが伝わるものであると思われたため、関係者の了解を得た上で掲載させて頂くことにした。

宮崎：今年のゼミでは、生活記録運動の学習をしてきました。1950年代から60年代に女性たちが生活を書くということを通して学んでゆくプロセスについて勉強してきました。今回、飯田にうかがいましたのは、当時、下伊那から四日市に働きに行かれた女性たちが多くて、その方々生活記録を書かれていたと知りましたので、もしも体験された方にお会いできればと思ったからです。そこで、木下さんに相談したのですが、よくお話を聞いてゆくうちに、それだけじゃなくて飯伊婦人文庫という活動が1950何年からですか、(吉田：昭和32年ですね)スタートして、書

くだけじゃなくて読むということを通して、女性たちが地域の中で自立のための学びを続けてこられたということがあり、なおかつ最近では、聞き書きという形でみなさんが調査されていることを知りました。その取り組みも広い意味で生活を記録する、この地域で生きてきた女性たちの生活を記録する運動だと考えているんです。そういう地道な学びを通して女性たちの自立がどんな風に進んできているのかということについて伺いたいということでお邪魔させて頂こうと思いい立ちました。まずは飯伊婦人文庫の概要と最近の活動、特に聞き書きですが、50年を振り返るとい活動がされた動機といいましょうかね、やった中で何が見えてきているのかというあたりについてお話いただければと思うんですけど。

吉田:趣旨がわかりました。そしたらだいたい4時ということなので2時間くらいでいいですか、みんな夕飯がありますので、すいません。そしたら6時半頃まで。

まず30分くらい私が流れっていいですかね、お話しして、今ここへ来てるのは中心メンバーなので、みんなそれぞれ人形劇と言え地域で忙しいものですから、今日はこれだけしか来ていませんが、その人たちも自立ということをみんながとらえて、婦人文庫の聞き書きをして自分の思い、歴史を見てどう思ったかっていうことをそれぞれ語ってもらって、あと質問して頂いてやってくっていいことですか。

ホントは、1週間くらい喋っても喋りきれないくらい、こんなに本作ってるわけですから。まず私たちは飯伊、っていうのは飯田・下伊那の飯・伊で、婦人文庫という団体です。それで「40年史」っていうのを10年位前に作ったんですけど、この飯伊婦人文庫っていうのは昭和32年にできました。それで40年くらい経った頃に簡単に言いますと、できたときは約7000人の婦人が組織されました。婦人会を基盤にして、婦人会が当時ほぼ網羅組織でしたね、その文化部ということでやりましたので、意識的に入るか入らないかというよりは網羅組織的ですので、厳密にということではなくて始めてまいりまして、何しろ本を読む運動というのは、女性が指導してやっていくということではできませんね、当時としては当然。できたときからいいますと、昭和32年前後といいいますと、女性たちは、私たちも調べてびっくりしたんですけど、もう戦後民主主義というのが昭和20年から発達してというようなことずっと学んできてましたから、この仕事始めてビックリしたんですが、この地方では、本を女の人、特に母親というような立場の女性たちが、町の人はもちろんだけど、中央・南アルプスの方に農山村があるわけですが、その女性たちっていうのは、本を手にするということがほとんどできない。本があっても読む姿を見て許される時代じゃなかったんですね。

それであちこちしますが、昭和32年になんでこれが出来たかというのと、長野県立図書館に、叶沢清介という有名な当時の図書館人が、日本の図書館協会の仕事やってた人が、長野県の図書館長として来て、意欲的ですね当時ね戦後の。見たところいちばん本を読まなければならない女

性たち、特に母親たちが本を手にする事ができない状況にあると。簡単な筋だけ言ってるだけですけど。それではまずいなあという気持ちの中で色々考えて、長野県の主な市がありますね、飯田市なら飯田市と下伊那郡とか、そういうところの拠点の図書館に配本所、本を配るところを置いて、全県に配本所を置いて、飯田だと飯田市と下伊那郡の村々に向けて本を配る。それを県の予算でやるということを考えてわけです。それで本を持ってきて配るんだけど、その本をどのように封建的な時代の中で女性たちに配るかということ考えた時に、叶沢清介県立図書館長はPTAの組織を通じて、基本的には学校へ持って行って、子どもたちに本を配る、それでお母さんに届けさせるというようなことを考えたわけですね。それで4人に一人のグループにして1回1週間とか2週間とかで本を変えていく。先生が子どもを通して配本するということですね。そういうのなんか映画がありますね。記録映画。そういう姿見て泣きましたよ。子どもがお母さんたちが働いてるところに届けるとお母さんが喜んで、読んでいる姿とかの記録映画がありました。

ところがこの地方では7年ちょっと遅れちゃったんですね。県は昭和25年に発足しました。それがここは32年でしょ、7年後って事になりますね。それはなぜかっていうと、県の予算でやらないかといった時に、当時の行政の人がそういう意識がなかったものですから、飯田市の行政の教育委員会をやってる人が、断ったわけですが、そんなことはできませんって。それで7年も遅れちゃったんですね。その7年遅れた中でいったん断るともう予算がそんなダラダラと使える時代はだんだん終わって、難しくなって、運動しなきゃ発足できない状況になったときに、どうしたかっていうと、行政は依然としてだめだったの。そんなときに、この地方は大正時代の青年団読書運動、大正時代ですよ、有名なんです。私たちが今あるのはそれを知ってなんですけど、読書って何事だろう、と思っちゃったんですね。大正時代の青年たちが、自分たちが本を読みたいて言うだけなら解るんだけど、それが集まって本を読書会と読んで、それで人々にも本を広げたい、だから図書館づくり運動になりますね。それでどうやったかっていうと、農家の納戸みたいなことか納屋みたいなことか借りて、そこへ集まってお金を庄屋さんから集めたり、大正時代ったらすごいまだ貧しい時代ですよ。農家の長男はほとんど動けませんね。そういう人たちが自分たちが伐採の仕事とか様々なんですけどそういうこと始めて、あっという間に長野県に400 这样一个ところが広まったと言われます。この地方を中心にしなごね。それでその辺が読書運動の基盤としてこの地方にありまして、その人たちが大人になりますよね、大人っていか地域を担う人になって、行政に入ってきて土壌になるわけです。そういうのが色々伝わって戦後民主主義の中でいち早く花開いたのがやっぱり読書運動ってことで。大正時代青年団読書運動もすごい有名で全国の研究者が資料集めに来るんですが、その次の山が昭和30年代青年団読書運動っていう大山がありまして、その資料もみんな見に来るんですけど、そういう盛り上がりがあったんです。それはやっぱり大正時代からの土壌が色々重ねられてそうやっていったという姿があるんですが、青年たちがすごいなと思うのは、県立図書館の叶沢図書館長の仕事を知らない

ままた、自分たちが発想して読書運動やってるわけですよ。それで自分たちがやる図書館づくり運動って言うのも当然発展してきますね、各村々で。そういうことと同時に、自分たちで発想して、母親たちが大事だと思って、県立図書館とか飯田図書館からグループ貸し出し、何百冊持ってきて、お母さんたちに配るって仕事もやってるんですね、団体貸出し。そうすると貸し出す方法も学ばないとできないじゃない、単なるボランティアでは。そうなると、図書館の仕事の方法も学びに行ったりして、ついには司書資格までとっちゃった青年たちもいて、貸し出してたんです。それで私たちが後になって聴いた、今ボケちゃってるような100歳近いような先輩たちの話の中に、三浦さんという記録映画のモデルになったおばあさんによると、何で私が本が好きになったかっていうと、自分たちが子どもの頃、奥深い山へ、青年たちが当時車もありませんよ、本をしょってきて体育館においてくれて、それを読んだから好きになったってといわれました。だからそういう仕事もやってたんですね、すごいなと思うんですけど。そういう青年団読書運動がありまして、その中にこの度の私たちの聞き書きのひとつテーマとしてやっている、その時代の読書会がどういう仕事やったのかというときに、青年団が仕事と同時に自分たちが学ぶという読書会に発展してくわけですね。それでいろんな読書会をやっていく中で、非常に矛盾が出始めた頃で、農村では経済的な問題、機械化、三チャン農業とか色々矛盾がでてきて、どうしたらいいかっていうのを勉強して、自分たちの生き方を勉強しなければならないっていうのが読書会の中心になりましたね。結局どうなっていくかっていうと、東大生たちもあそこ行くと学べるってこの地方に入ってきて、どういう方向性になるかっていうと、結局当時の青年たちはみんなそうですけど、マルクス主義の社会科学を勉強して、農村をどうしていくか、自分たちの生活をどうしていくかを系統的に勉強しなければならないっていう読書会の傾向でやり出す。かたやそういう土壌のときに、県立図書館が配本グループの運動をやってるらしいって聞こえて、飯田は断って穴になってる、何事だ、って青年たちがもう一回飯田へ配本運動を誘致したいって、運動を始めたわけです。青年たちが様々に画策して、公民館長を動かしたり、行政動かしたりして、何度も陳情するわけですがOKとれないんです、いっぺん断っているから。もうすごい予算が要るじゃない、7000人単位の女性たちに本を配るんですから。そうするとうんって言われなくて、7年も遅れちゃったんです。最終的に、行政に有名な松澤太郎って今の人形劇が文化の街になる基盤を作った市長が教育長として出てきまして、実現したと。涙涙の物語で最初知ったときは本当に感動しました。それで飯伊婦人文庫も昭和32年に始まりまして、それで7000人の女性に本を配るのはなまじっかなことのできる仕事じゃないんですね。特にさっき言ったように、当時は女性が本を読むことも許されない時代ですから。指導者がいない。そうすると、図書館が指導することになります。当時色々優れてると思うのは、松澤さんが図書館職員を増やすのに青年団読書運動した人たちをひっぱってきて、面接して職員にするんです。それで青年団だけでなく竜丘出身の木下右治って校長が社会教育活動をすでにやってたのが、退職されたので、飯伊婦人文庫

に7000人も抱えて大変だから、やりたいようにやってくれて連れてくるわけですね。後に図書館長になった今村兼義とか斉藤俊江とか中平多徳とか青年団をやったような人を職員にして、そういう仕事をさせたわけね。ここのやり方のどこが変っていたかっていうと、他のPTA母親文庫のようにただ本を渡したいっていうわけじゃなくて、この地方は昭和30年代の読書運動のつぼですから、それが知れてありとあらゆる全国の読書運動の人が寄ってくる。小笠原礼法の家元の小笠原忠統って言う人が東大出て松本の図書館長になって、独自に始めたのは、叶沢さんは配本だったけど、忠統さんは配本なんてだめだ、読書会運動だって。青年団の読書会運動を指導したのはこの人で、文学だけの読書会は昔からあったんですが、あんなのは趣味だからだめだと言って、最初から簡単にいったわけではないけど、自分たちが生きていくのに役に立つようなこともしなければと言って、そのときに全ての人がやれる読書会にしなきゃならないと言って、みんな楽しくやれる工夫をしたんだそうです。みんなで歌をうたったり、自分の意見が言えなかったらえんぴつとノートを持って前の人と筆談するなどして案外開かれたそうで、大衆的に読書会ができるような工夫をして、長野県中に読書会を広めたんですね。特に拠点になったのはやっぱりここです。歴史的土壌があるから。ここに花開いた。それで長野県に読書会連絡会とか色々作ったんです。

そういうことで、今度は女性に戻ると、そういう人たちが女性たちを指導してくれたんですが、本だけ配るのじゃだめだって思ったわけですね、ここの指導者たちは。そういうのがいっぱい見えるから。だから読書会をやって、本を読むだけじゃなくて本をまず読む、それで書く。読んだことを書いて記さなければと。それから話すこと。読んだことを話してコミュニケーションをとって、世のため人のためになりながら自分のものへかえっていかなければ、という指導したんです。最初から読むこと・書くこと・話すことという三本柱をたてて指導したんです。すごいですよね。木下右治先生が中心になりながらやったんですが、社会教育の天才だなあとと思うくらい全てを取り入れていて、それを松澤太郎教育長、後の市長が全面バックアップしたわけです。何やってもいいよ、っていうのは何やっても響き合うのがわかってたからですね。それで自由にやらせて、その下で多くの若い職員、私たちの先輩も育った。女性たちの読書会もいっぱいできたんです。そういう中で、読書についての文集を作り出すわけです。昭和32年発足してからちょっとしてから始めて、間欠けたこともありますが、ほぼ今年で50年になります。読書についての文集としては、世界調べてないけど多分ギネスもの。長野県にしかないじゃん、もともと。配本運動が起こって10年くらいで指導もされたらしいけど、あつという間に読書についての文集はなくなり、生活記録の文集になった。生活記録運動は昭和20年代からこの地方にはあるんだけど、生活記録になっちゃって、読書についてのテーマでやったのは、飯伊婦人文庫が発足して10年もたたないうちに全県になくなって、ここだけになったという記録がある。団体としてやるとこについて読書推進協会っていうのに聞いてみたら、長野県になければいけないんじゃないって

言われて。でも大事ですよ、誇りを持ちながらやるっていうのは。すごい苦勞してやって、今の時代にこういうのをつくるのはものすごい大変なんですけど、続いています。

読むこと書くこと話すことを指導して、代々の図書館長に優れた人がついて、指導されてきましたが、10年位前から行政の方針で、図書館長が図書館人でなきゃだめだってわかっている法則なのに、松澤さんはとくに市長じゃなくなってるから、なんとかして合理化しようと思うわけですね。囑託図書館長にしたかったのが反対にあって、行政の図書館長にして2年後に退職するような人がきて、去年なんて1年で変わったんですよ、そんな人が図書館長やれると思ってるところが変なんですけど、本をどう考えてるか、どうにもならない時代になって。私たち10年前に捨てられちゃったみたいな形になって、何千人っていう網羅組織は、婦人会自体が壊れてますからあつという間に壊れていって、その時は二百人位になっていました。10年位前に将来行政からきた人が図書館長になるってわかってたから、3年も口説かれてホントにいやだったけど、私が委員長に据えられたんです。2年の任期なんですけど、1年やったときに、今村兼義という飯伊婦人文庫が昭和32年にできたときに図書館へ職員として入館した、昭和30年代青年運動をやっていた人が館長だったんですが、退職されたわけです。婦人文庫の中に自分たちで仕事をやる人は育てていない。図書館の中で今村さんが退職してから婦人文庫を指導できる人を育てていない。それぞれいっぱい仕事があって忙しいから。それでえらいことになったな、っていうのが見えて困ったな、となったときに、「振り返れば未来が見える」って社会通念があるじゃん、歴史法則って言いますか。歴史的にものを見ると現代、未来が見えるって。私たちの時代はいっぱい社会通念の大事な法則が言葉としていっぱいあったんです。で、それがあの日パッと浮かんで、そうだ歴史をつくってみようと思って。でもその時婦人文庫が何にも育てないもので、資料が何にもないんです。だから読むこと書くこと話すこと、で昭和32年発足した、しか言えないんです。誰も何もわからない中でどうやるのってなったとき、歴史を調べてみるかってなったんです。それまで今喋ったこと何にも誰も知らなかったんです。年表みたいなものかなって気楽に、難しいかなと思いつながら、司馬遼太郎が大衆的に語った本の中に、歴史なんて年表を時系列に並べていって、見た人が脈絡をもってどう語れるかというものだと言われていて、私たちでもできるかな、年表調べればいいのかと思ったわけ。

でも資料がないからどう調べればいいのか、推理小説みたいです。木下右治先生というひとがいたらしいとわかって。そうだ、文集があるじゃないか、文集だけはずっと並んでいたの、文集をみんなで読み始めたの。ところが事業は書いてないから、どういう風にしたかはわからないけど、人々が最初の頃本を見てどんなに嬉しかったかということがいっぱい語られてるのね。まだ匿名だったりするんですけど、朝早い農民なのに、さらに1時間早く起きて読んだとか、便所の灯りで読んだとか、そういうのがあるんです。この街場でも暇があつて読んでても見られたら大変なことになるから、本を読むときには、縫い物を置いて人が来たらすぐ隠せるようにとか、も

う 93 歳で私たちの「灯り」となっている人が実際に語ってやってくれるんです。それかみんなが寝静まった後に、隣に舅とか姑がいるとすると、ページをめくる音が聞こえないように苦労したとかね。もう涙が出てきますよ。私たち 10 年前は本がもう溢れていて読まない時代だから、いかに読んでもらうかの時代だから。本っていったい何、というのもわからない時代でしたから、文集を元にして、各公民館の館報とかみんな集めてきて、紙に年代ごとに事件を書いて裏へ資料を張って、それがいっぱいになったのを、司馬遼太郎のように眺めてみようって、絵に描いたような話なの。それで野間読書推進賞を受けて、読むってことは相当の何かがあるらしいとわかった。婦人文庫はみんなでだから読んできた団体だとも言えるようになった。みんなとだから難しいものを読めた。みんなとだから自分の読む範囲でないものも読めた。みんなとだから深く広く読めた。それくらいの法則はつかめたわけ。どうも相当大事なものだということはわかったんですが、先達の先生方やみんなが言うのは、読書は 30 年たたないと効用が出てこないとか、肥料であるとか、堆肥のようなものだとか、闇の森を形成するものだとか。そういうものなんだとわかったんですが、その程度だった。どうも大事そうだなあと。読書は趣味かそうでないかってテーマがでてきたとき、以前はだめだったけれど語れるほどにはなった。社会教育委員に 8 年もいて、この地方の社会教育の先生が読書運動なんてどうも腑に落ちない、納得いかない、本来、読書なんてひとりでするものだと言われたときに何も言えなかった。その程度だったけど、大事なものだからどうにかみんなで作っていきこうと役員はできたんですよ。ようやく何にも見えない人たちがこれだけのものを作った。相当大事なものらしい。この運動もどうも他にはないらしい、ここが相当大事なことやってるらしいことはつかめた。それじゃ頑張ろうと。それで役員なんかやったことない、図書館がやってくれるお話を聞いて勉強してたような人たちが自力でやりだしたんです。そのとき資料はないけど生きてる先輩たち、昭和 32 年頃どうだったか語れる先輩たちに色々お話聞いたところ、普通のおばあさんなんだけど、すごい素敵なんです。何事だと思ったわけ。私なんか名古屋から来たから全部世間様で、何やっても責められて色々言われるような感じなんですけど、ひとりひとり聞いてみると、素晴らしい。本を読み続けてきた人たちは、顔は普通のおばさんだけど、すごい素敵なんです。みんなもこれは記録しておかなければって、何で記録なんて高度なこと思ってたかっていうと、女性が何か作ろうとすると、歴史館行ったり、女性史とかほとんど読みますね。そういう中で、どうも女性というのは社会の中で記録がないんです。ほんとに記録がない。そうだ、あの素敵な人たちの記録を残そうかってなったわけね。それじゃあ 100 人くらいやるかなって、無謀だよ。人生を語るなんて 10 人くらいやればすごいっていうのを、何も知らないもので 100 人くらいやらなきゃと思ったんです。だってすごい素敵な先輩多いから。だけど、聞くには自分たちが聞かれてみないとわからないなあとそこから始めて、結局「聞き書き—女性 70 人の読書と人生」ってことで、最初は全面的に一生聞こうと思ったけど、とんでもない、恐ろしい。人の一生聞いてたら何人かで終わっちゃう。それで読書

と人生って私たちの団体としてはテーマ決めようかと。ひとりを年表にまとめて、ライフ・ヒストリーを作り、文庫の中核に関わった人はじっくりまとめようと。資料は結果的には70人から聞けたんですけど、聞く中ですごいドラマが生まれた。70人の人生を並べるとありとあらゆる法則、大抵法則はでるんですよ。並べて見えたものを目次にして、通し文として前につけました。結果的に良かったのは、全部の人に名前を出させたわけです。社会教育の先生たちもよく名前出しましたねって言ったけど、当たり前のように名前を出さなきゃ、そんなものHとかAとか書いて、私たちがでっち上げたと思われたらどうする？という感じで。世のため人のためだから名前出さないか、と。そのかわり嫌なことは出さないから。聞き書きなんていうけど初めてだから、自分が嫁であり妻であり母であり世間の一員であり、という中で自分が主人公で聞かれたことなんてなかったんですよ。聞かれたことで1週間眠れなくなった、ぐちゃぐちゃになっちゃって。私たちの言葉で言うと、自我に目覚めちゃったわけですよ。人に喋ったことのない、喋っちゃいけないことまでいっぱい聞ききました。だから全部は出てません。すごい色々聞きまして。一人だけ例を出すと、つい今までいつ自殺しようと思ってたって70いくつになる先輩が言うんですよ。当時農村はみんな働き手ですから、祖母が水車小屋の当番しながら子守をしていたと。ひもでしばって子守唄を聞かせて仕事していたわけですよ。それを思い出して語り始めたわけ。自分でそんな風に頭に詰まってるって知らないのに、20、30と言い出す。そのまま言葉が頭に詰まってるわけ。言語学の色々が全部出てくる例ばかりなんです。最初は一緒に歌ってると思ってたけど、違うって。お祖母さんが繰り返す言う中で言葉が脳に埋まっちゃったと。だから子どもに言語をどう与えているか、それが脳の思考をどう形成するかっていう例にもなるよね。だから彼女は頭が良くなったわけだ。彼女は竜丘の人だけど、竜丘村の図書館で、お父さんがいちばん本借りる人、2番目が彼女っていうくらい本を読む人になって、そうすると頭良くなるじゃない。だけど貧しいからいわゆる女学校に行けないわけ。そうするとものすごいものが見える中で、女学校行けないっていうと、女学校行った人が心無く踏みつけるんですね。聞き書きする中でいっぱい例を聞いてきましたけど、女学校行ってないなら婦人会の幹部になっても理事なんか無理って言われたり、あらゆる差別を受けるもので、彼女はうんとトラウマにならずと死にたいと思ってたって。そんな人じゃないに、明るい立派にいい仕事をして、なんだけど、心の深部ではトラウマが解消されなかった。私たちに今のようなことを喋って、私たちが考察をするわけじゃない、法則を見つけるのに。その人の一生を見ると、だいたいどうなってるか見えるわけ。それを彼女に伝えたら、初めて解放された。初めて死にたいと思わなくなったって。そんな例もありましたね。いっぱい人には言えないようなことも語れるようになった。後には方々役に立つようになって。ですから、読書だけじゃない法則も見え始めて、その中で読書に関する法則だけ集めたのがこの本です。その中で最も大事な法則は、読書が人間の根幹に関わっている、ということが完璧に法則として、科学として見えました。それと教育心理やると、思春期までに教わったことやす

すべての経験が血や肉になるでしょ。読書も同じだということがわかりました。社会教育の先生も、これだけ並べて見えた法則は否定できないという感じで。それから私たちは全然違いましたね。読書の意味がわかった。読書は趣味か何か明確に答えられないなんて言わなくて良くなった。ところが全国では読書科学みたいな研究ってないね。ないから今のようなことを研究者が本に出して広めていてくれたら今のように読書が潰れないな、と思うんですが、そういう場所がないから初めて私たちはたどり着いた。これが出てから中学の先生ですごく感応する先生が出てきて、竜峡中学によばれて、全校生徒の前で話しに入って、感想いただくと、外には出せないって言うので現場に行ってみせてもらって。私ちょっと英語教えたりして子ども知ってますが、今の子どもなんてほんと調子いいんですよ、二面性？大人はこの地方なんて裏と表きつく使い分けないとこんな盆地で生きていけないからすごいんですけど。子どももそうで、大人に対する顔と本当の顔は違うんですが、その感想は、明らかに体が動いたっていう感想です。お世辞に先生にかっこよく見せるっていうんじゃない、歪んだような字しか書けないような子どもも体から出る感想を書いている。すごい感想は、中学生でこんな感想が書けるものだろうか、先生たちも読書はだめだと思い込んでるけどすごいよな、というもので頂いて、やっぱり読書は人間の根幹に関わるものなんだなと。それが教育の現場でも落ちちゃって、中学の教科書なんて漱石も鴉外もない、国語的に言うとゴミのような教科書ですよ。受験勉強的なね。血や肉を育てる中学・高校時代にそんなんでどうするんだろう、というのがわかってきまして。後に彼が(木下巨一さん)PTA会長の高陵中学によんでくれるようになって、2年続けて、同じような事態が起こるようになりまして、それをきっかけに中学生との読書会が実現し、今高校生との読書会を月1回定期的にやることになりました。そこではゲーテの「ファウスト」もやるんですよ。女ってゲーテとか、ドイツ文学好きじゃないですよ。ところが斉藤孝先生の理想の国語の教科書に出てきちゃった、しょうがないでやるかって感じなの。ある程度調べておかなきゃいけないじゃない、高校生とやるときに、ただ読んで感覚的にやるだけじゃ読書会ってだめですから。長年の友達関係の読書会ならただ輪読するだけでもいいんですよ。でも勝負かけなきゃいけないじゃない高校生とだから。それで勉強して臨む中で、私たちも開かれた。まず学んだ。高校生たちからどれだけ学んだか。何でって、ゲーテなんて時空超えるじゃない？私たちは読んで意味を理解できる文学じゃないと嫌なの。マンガ読んでないしファンタジー読んでないし時空超えれないもん、頭が。ところがゲーテのファウストなんてギリシャ神話から聖書から天使から天行ったり地獄行ったりしてるから嫌だなあと思って。でも世界で一番の文学で言葉だって言われて、やらなきゃと思ってるうちにいちばん最初に開けたのは子どもたちだった。子どもたちが目をうっとりさせて読み出したら私たちだって、くそ！と思ってしょうがないから全部やるけど、全然感動しない。前の委員長の毛利さんは典型だけど、「くそ！と思って2度読んだけど2度読んだって感動しん！」って、高校生を見てこっちまで開かれるんですよ。高校生が感動しちゃって、小西悟さんって人が、ゲーテの

本、1万円近くする分厚い本を高校生が「触らせて〜」ってね、教育次第であなるんですよ。それを高校生が二人読みました。文庫本はみんな読んでるんですよ。私たちおばさんたちもチクショウめ〜、って感じで3度くらい読んでようやく感動するようになりました。「理想の国語の教科書」では1回分出てくるんですが、何ヶ月もゲーテに囚われちゃって、シェイクスピアも囚われちゃって、一応「理想の国語の教科書」が終わったらゲーテの「ファウスト」もしこしこと読み合おうね、ってことになってるんですが、卒業しちゃうものでだめですが、夏休み帰ってきたらやるって感じになってます。

で、次が聞き書き。何をやってるかっていうと、最後の仕事として、この地方しかない土壤、この地方だから私たちが歴史的に見たから今のように普通のおばさんが、来た先生とかみんなが失礼なのよ、「普通のおばさんだら？普通のおばさんだら？」って何べんも言うんですよ。そうですよ、って。これだけものを見て、これだけ発展して、これだけの仕事って、どういう人がやるんだろうって思うじゃない。これだけするためには司馬遷の「史記」を読んだり、フロイトの精神分析を読んだり、精神分析のやり方を覚えないと、聞き書きできないんですよ。やっても見えないから。そしたらみんな喜んで、子どもたちにも威張って電話で話したらどえりゃーびっくりされたとか、けっこうそれだけでみんな生きがいになったり。難しい本も色々読みながら「つながり」をやりました。これもみんなとだから読めるし、未来につなぐ土壤をつくるためみんなで作ってるから、相当な頭になってくるじゃん。どういう頭かって言うと、ものを語れる頭じゃなくてもものが見えるようになる。だからホントに失礼だけど、あまりの感動で普通のおばさんだら？って何回も言うんですよ。そこに現われるように誰でもそうしていけばものが見えるようになって世の中よくなるかな、ということにつながるんですけど。さっき言ってた女の人がどのように自立してくるかというときに、昭和30年代に、松澤太郎さんや木下右治先生たちが女性たちをどのように指導したか、ということなんですよ。見えないものを見る、事実を限りなく事実としてみる、そのために本を読むんだよ。そうすると世の中をよくするための社会の活動ができるし、生きることもできる。だから死ぬまで本を読み続けるんだよと。まとめるとそういうことをよく文集見ると書いてある。私たちも直接今村兼義さんから言われましたけれど、そうやって引っ張ってこられて、おかげさまでこういう仕事までできるようになって。そういう土壤があるからですね、どうもね。

今は最後の仕事として、高校生との読書会でびっくりしたわけ、腰が抜けちゃった。高校生があんな風になるって。そうすると、20代も30代も40代も50代も60代も70代もいるから、そんなに大勢は来れないですね。最初は来たんですけど、やっぱり難しいことはやってないけど、本質的には難しい。自分を変えていかなければならないので。それでそんなに多くはないですが、だいたい年代を網羅した人が来て、変ってくじゃない。それを見て、読書会って何だろうっていうことを強く強く思いました。いちばん最初に思ったのが飯伊婦人文庫40年史をつくるときに、

さっき言った大正時代青年たちが運動したことを知ってね、読書って何者か、読書会って何、読書会やったから自分たちが読むだけじゃなくて人々にも本がいるっていうことが生まれたわけじゃない？だから読書会って何事なんだろう、っていうのはずっと問題意識だったんです。どうも読書って言うのは相当のことがあるなっていうのは大正時代から、それで高校生との感動的な日々からもそう思いまして、いっぺんこの地方しかないだろうからまとめてみるかって。去年まづこの地方の読書会を調べたところ、読書会はまだ 60 あります。その中の主なものを聞き書きしてまとめてみるかなと思ったわけ。そんなに難しいことはできないから、読書会ってどういう歴史なの、どういうとこなの、ということを知ってまとめてみようかなと去年から。これもまた、人を聞いたときも腰が抜けましたが、読書会もある程度舐めてた、ステレオタイプに思ってるじゃない、読書会ってある程度の。ぜんっぜん違います。声がひっくり返るほどですけど、考えてみれば、こないだみんなでもめたんだけど、つながりやっとなら、人はひとりとして同じ人はいない。百人百様って社会通念があるじゃない、社会通念っていうのはホントに人間の大事な法則を言うんだなと思いました。ホントに百人百様、ひとりとして同じ者がない、人はすごいものだとわかったんですね。そうすると、ひとりとして同じ者でない人間が集まって読書会やるわけじゃない。で、読書は人間の根幹に関わる。そういうものをやるわけじゃない、一つのグループで。そりゃあ、同じものができるわけないよね、ってこないだ結論付けたんですけど。いつもわかっちゃえばもう、何かたいしたことないような、読書だってそうじゃん、考えてみれば人間の根幹に関わるなんて当たり前じゃん。言語が発することから考えればそうじゃない？言語が発して思考になって、何々…って考えれば当たり前じゃない、脳科学とかそっちからせまれば当たり前のようなことが、ちゃんと読書、って出てないから、やってみれば当たり前のことだけど、調べてわかった。読書会だってやってみれば当たり前だけど、私はステレオタイプに思ってた。それが、すごいです。今それをまとめつつあります。聞き書き 30 くらいの読書会をしてきて、ほぼ目次、つまり法則になりますね、を立ててきて、今の段階で。まとめに入るといっばい法則が出てくると思いますが。来年の3月までに原稿をあげて、今頃までには飯伊婦人文庫 50 年になりますので、50 周年記念と出版記念と合わせてやりたいなと思って、一生懸命頑張っています。

何でこんな仕事ができるかって言うと、やっぱり感動するからですね。ホントに人ってすごいな、本ってすごいな、その掛け合わさったものはすごいなと思うから、「つながり」の時からこの10年でこの3冊っていうのは実は恐ろしい仕事だって言われます。私たちも恐ろしいことやったな、と思いますが、時との戦いじゃない。相手が 90 過ぎた先輩が5人ばかりいます。すごいです。すごい。老人学的にも言えますけど、80、90 過ぎたらおばあちゃん、っていう感じと思うじゃない、それで私たちの知らないこと知ってるわ、って思うじゃない？違います。私たちも 90 くらいになったらあのくらいになれるかしら、という、ものの見方、人間のふくらみ方。すごいですよ。汚くなる、物忘れ、集中力がなくなるそういうのは人間だからありますが、今老人脳科

学でも辿りついてるけど、現場にいるんですよ。そういう人たちがいるから急ぐんですよ。自分たちもやっぱり年でしょ。私も脳梗塞で死ぬ死ぬ言われて10年くらい生きてる人なので、みんな何か抱えてやる側も相手側も時との争いなんです。90超えた人たちがやってる読書会も実はいっぱいあるんです。語ると長くなるから、また本ができれば是非買ってください。お金がないもので、予算もなかなかつかないもので。前の図書館長が感動して、図書館の事業をのばして、市から出ないけど、60万円予算つけてくれて、歴史研究所からも10万とか、前の図書館の係長も辞めるときに10万くださったり、こないだは細井さんっていう93歳の先輩も頑張ってくれ、って10万くれました。そうやって100万になるけど、100万じゃ2500円で売れないから。本作するのに4、5千円かかるけどそれじゃ普及しませんから。私たちも全部手弁当ですから。そういう仕事やっています。だから1週間語っても語りきれない。人と読書会があって、自分たちの成長もいちばんあるでしょ。それで今の婦人文庫もあるから。こんなことでは足りないと思いますが…また来てください。あとは一人ずつ。30分っていうのにえらい時間だ。そしたら今先輩から、塩沢さんは副委員長ですが、3つの本に関わった人です。婦人会の丸山ってとこの文化部として婦人文庫へぽっと出てきて私、ってものと出会っちゃって、今村館長がいないときなんで、えらい目に最初はあって。こんなことさせられて、今はどう思ってるかってことから言ってください。

塩沢：それは大変なことだね。婦人文庫は発足当時の母体を婦人会においたため、婦人会の文化部になると何も知らない人達でも、婦人文庫の運営委員となり、一緒に運営する形をとっていたのです。婦人会の文化部となり何も知らない私が運営委員になったのは平成3年です。ちょうどその2年後ですか、婦人文庫の歴史を知らなきゃ何もできない。40年史を作ろう。婦人文庫がどんな歩みをしてきたか、歴史はどうだったか、調べようという案が委員長から出たんです。じゃあ調べようかってことで、婦人会が発足した当時（吉田：昭和20年代ね）婦人会の中島千代さんが、エンピツを持つ女にしたいってことで、雑記、さっき先生がおっしゃった生活文を書いた文集を各村ごとに発行していてほとんどの村が持ってた。（吉田：生活記録集ね）各村で生活様式が変わっていくなかで、生活記録集の発行が困難になり、婦人文庫の会員で発行している『読書についての文集』に繋がっていったんです。これらの本を参考にして調べていったのです。図書館大会はどうやっていたとか、どうゆう風にしていったとか。女の人たちが本を読むのは酷だとされていた時代でしたが、回ってくる本だと、公に読んでいても何も言われない。ご主人も本が回ってきたから読めよ、と助言してくれるようになって、読書ができることを非常にありがたい、と婦人たちが感じるようになったと、文集1号・2号ってところに書かれていたんです。ああこんなに苦労して本を読んでたんだ、私たちが育つ時には戦後の本がない時期で、国語の先生たちが本を読み、って薦めてくれて、村では本を買えなかった時代に、先生の本を持ってきて図書館に置いてくれて、その本を読ませてもらってた。それで私たちが本を好きになって育ってきた。

今みたいに溢れてないものですから。その時代に育ったお母さんたちは、苦勞して本読んでいた、ってことがわかった。その次に「つながり」でどうして本が好きになったか？という 70 人に聞いた法則の中で、生まれながらにしてお母さんが語りかける。それこそお祭りの話だとか、ヒモでつながれて民話を聞いたりわらべ歌を歌ったりとか、物心がつく前から話してくれた、それがみんな源流になってたね。「三つ子の魂百まで」の言葉そのものを実感として捉えた。

吉田：塩沢さんがどういう風に婦人会から出てきて、3冊の本からどう成長したかとか、女性の成長を聞いたとかいう話もしてみたら？

塩沢：次に読書会。読書会っていうのも、飯伊婦人文庫を指導してくれた先生が良かったってことかな。木下右治先生にしろ、池田寿一先生にしろ、とにかく文学的な先生がいらっしやって、みんな読書会をするんだったら、その先生が指導して始めてくれるっていう土壌があった。ので素晴らしいなって。婦人会から来て、とにかく自分の好きじゃない分野の本が読めるわけですよ。これをやるからこの系統だてた本を読もうって。今つくづく考えてみると、今年河合隼雄さんと呼ぶんですよ、図書館まつりで。それで河合隼雄さんの話を聞くのに、ユングだとか、それこそ精神学的なことを河合隼雄さんはかなり言ってるんですよ、本読むと。それが私たちが「つながり」とか 40 年史作るときに、精神分析でフロイトとかユングとか史記だとか、いろいろ読んできたのが今になって役に立って、あ、河合さんが言ってることはユングではこう言ってたね、とかそういうことも勉強させてくれて、大変喜んでます。

吉田：彼女の成長を見ていると可愛いなと思う。どういうところが可愛いかっていうと、婦人文庫やってる人は赤い人だと思ってたって。何で？っていうと、こういう本はあからさまな真実を追究してるじゃん。今はそうじゃないってわかってきたわけだけど。あからさまな真実は赤いって思ってた。彼女はすべて心を開いてくれて。最初思ってるときはいわないけど、婦人会だけのところにいたときはそういう風に見ていたの、婦人会の中ではかなり優れた人なんだけど、婦人文庫のような仕事をするということが、一人の人のものの見方をどう変えていくかという典型です。

久保田：はじめまして、久保田と申します。婦人文庫の歴史など、委員長・塩沢さんのお話しされたことと重ならないように、私は何故婦人文庫に入会したかということをお話し致します。お二人がお話ししました『40年史』は、私はまだ入会していませんでしたので、買うようにいわれまして、買って読みました。そこに木下右治先生の戦後すぐですよ、この戦争をくぐり抜けてきて、女の人も、もっと本を読んで、真実を見抜く力をつけなくてはいけないというようなこ

とが書いてあったんです。その一文を見て、あ一本当にそうだ、何年経っても、そういう真実というものは変わるものではないし、自分たちが心して生きていかなくてはならないということ、この『40年史』は言っているなということ、入会しました。それと、もう一つきっかけがありまして、長野県PTA母親文庫の会が諏訪にありまして、そこで堀井正子先生の講演を聞き、井上靖著『氷壁』だったんですが、この小説は余り興味がなく、軽い気持ちで参加したのですが、この小説がどういう過程で作られたのかお話し聞いて、文学の見方をガンと頭を打たれたように変えられました。この二つのことがキッカケで入会しました。

『つながり』の編纂の中で、人は百人百様、一人一人が本当に素晴らしいライフ・ヒストリーを持っていることがわかり、聞き書きさせて頂きながら、先輩の方々に対しまして、尊敬の念で一杯でした。入会して間もなくでしたが、本当に皆様から多くのことを教えられました。

久保田：この文集についてですが、一応編集長をやっておりますので、今年3年目になりますが、文集についても話すようにということですので、お話しします。生活雑記のことは、さっき先生のお話しにありましたように、「生活雑記の文集」は、他にもあるそうなんですが、読書についてまとめた文集は、ほとんど日本に無いんじゃないか。さっき委員長が言いましたように、ギネスものではないかっていわれているんです。それで私もほんと力の無いものが必死に会員の皆様と共につくっているのですが、もし、皆さんがこういうものを他につくっているっていうことを、お聞きすることがありましたら、また、是非勉強になりますので教えて頂ければと思います。(私の持っている)これは、44号で、今45号の構成を作り、そろそろ開始するところです。役員会、運営委員会で話し合いながらやっています。原稿を集めることは本当に大変な時代になりました。先程、委員長が話しました、この44号に「高校生との読書会」に参加して、どういう思いを抱いたか、5名(男子2名・女子3名)の高校生の文が載っています。是非とも読んで頂ければ嬉しく思います。

吉田：お土産に渡します。あまつるから。

久保田：お金はほしいところなんですけど、学生さんということ。

宮崎：どこに配布しているんですか。どういうふうに販売しているんですか。どういった方が手にするんですか。

吉田：販売っていか手売り。

宮崎：「つながり」だけで。

久保田：はい。広告もね。

吉田：広告何十万だっけ。30万くらい集めるんです、これで。それで1100円にして、2千いくらの1100円にして、千円だったんですけど百円上げにゃあ、なんともならなくて、みみっちなんだが、賛同して、ほんとにねえ、広告取りに行っても、こころよくいただいてねえ、私もほんと感動しています。

吉田：こういう仕事やるようになって、広告が取りやすくなった。それと広告の意味をみんなで話し合った。先輩達が「ほんとやになった、広告取りが、一番辛かった」って言うんですね、ずっと広告つけてきたから何十年も。だけど私達広告取る意味はって話し合っ、やっぱり2千いくらのものを1100円で、多くの人に読んでいただくということが大事で、文化のために、取るんだということをお話しながら、取るには、私達が知ちゃんといい仕事してないとだめだから、そうするとおのずと、こう伝わるじゃない。だから自然、割合辛くなくて取れるようにこのごろね、それとあの、辛いところは、ま、辛いところはこの時代、いわゆる昔のいう辛さがあるところ。だからなるべく一人で行かないで、何人かで行くとか、そういうことをしています。それで、この時代30万ったらすごいな。

久保田：ありがたいですね、本当に。

吉田：そういうのをみんなで、運営委員のみんなでやって、やります。で、書くっていうことでは、池田という先生が、図書館長になったときに、あの、書くとね、読むって書くことで完結するんだと、だからもうどんなことでも書けて、そうするとまた書いたことによって、何年か後に百花繚乱と咲き乱れるだろうって書いてあるんですよ。本当にねえ、あの40年史のとき、百花繚乱と咲き乱れたと、文集があったから、こんなふうの花開いて、っていうそういう法則をみんなでね、自分達のものにしとるわけ。だから文集にあの大事な書く、みんな書こう、ね、って言って。だってほっときゃあ家ね、書くことなんか、だからその、世のため人のためなんだって、それがこの40年史につながりを作り、こうなったんだから、意味をすごい、もうね、暗記させても、編集長にもね代々言って、それで運営委員に頑張っ、最初はね事業の記録もね一生懸命載せるようにしたの。40年史もね困ったの。で、事業の記録はさ、いろいろブーイングもあってね、なんとか言われたんだけど、その時も一生懸命根気に根気に何年も何年も意味を説いてね、するようにしていかないと、女の歴史ってものは消えるしかないんだから、事業の記録は載せること大事って行って、今、あんまりブーイングが、時々それでも出るけど、新しく運営委員

になったような人が、「売りにくい」とか言って。だけどこれは機関誌だから、いわゆる冊子じゃないから、売りやすい売りにくいっていうよりも、意味で人々に伝えていかないと、どうせ売れるものじゃないんだから、って言って、今だいたいそれでオッケーだよ。だから常に意味、意味を押さえながら、それでみんな、それをすることが続いてきたと思います。ただ、やれやれって言ったってね、それをやっぱり 40 年史、つながりっていうものに結実したことでまた法則というか、意味というか、それがわかるので、それでみんな確認しながら、そうするとその意味が自分の生きる考えのもとにもなるじゃない。今のように「書く」ということの意味、「記録」というものの意味、「歴史」というものの意味、というようなことがね、それで、読んだものを書くことで完結するってほんとにだなぁって。ほんとにっていうか、残る。自分としても残る。で、今度は世の中の的にも残る。だいたい今そんなことしてますね。あとで、一冊ずつちょっと残ってるものですから、あの印刷所がね、サービスで百冊くらいくれる。ほんとに、うんとそこで儲かるんだけど、そう売れるものじゃないもんで、最後に困っちゃうんですが。

じゃあ、最後に小林さんて、今のね、この読書会の聞き書きの事務局長をやっていたいて、新しいんですけど、それで、本作るって編集長になりました。

小林：私は、飯田の隣の高森町から来ています。ほんとにお二人とは全然違って昨年飯田のほうへ来るようになったものですから、さきほどの婦人会の方の体験とか、それから婦人文庫のことも全然わからない状態で、なんか変なことばかり言うものから、たぶんみなさんの矚矚を買ってるようなところが多いんじゃないかなと思っています。それで、今年、読書会の聞き書きということで、私はどっかかっていうと、書くこと、書くことといってもほんとにたいしたものじゃないんですけど、書くほうをやったものから、読むのも書くために読んでたっていうのがありまして、読書会を聞き書きするということで、個人的にもすごく興味がありましたものから、やらせていただくようになりました。それであの、読書会にあちこち入らせていただいたんですけど、さきほど委員長が言いましたように、その都度感動、感動して、帰ってまいりました。それで、明日の夜、急に聞き書きに入ることに決まりまして、その読書会は昭和38年に始まっていますので、ちょうど44年に今年なるんですが、「7月で終わりにしました」っておっしゃるんですね。せっかくだから、ちょっと聞き書きさせてくださいっていうことで、お願いしましたら、みなさんを集めてくださって、急遽するってことになったんですけど、そのおばあちゃんが今朝、電話くださりまして。「私は読書会で人間にしてもらいました」って言われたものから、私びっくりしてしまって、それが本当に、あっさりその言葉がほんとに出てくるんですね。読書会ってそういうものなんだ、読むと書くっていうことは違うものなんだ、っていうことを改めて、思い知らされました。で、明日は委員長をはじめみなさんに一緒に行っていて、それから高森町も今読書について、積極的に読書を勧めるということがあまりないもの

ですから、できるだけ図書館が働きかけて、読書会を勧めるとか、そういうことをしていただきたいなと思って、図書館の職員の方にも「せっかくだから行きませんか？」というお話をしまして、行っていただくようにしました。そんな風にしてあまり話すことはありませんが。

吉田：そんなことで新しい方も国家公務員で退職されて、やっていただいて、実務的にエキスパートだった。

今こういうふうには、いろんな人が婦人会の文化部的な要素はほとんどありません。一生独身で看護婦さんで働いている人がいたり、いろんな方がいます。今の市長さんの娘さんも、いろいろね、もうありとあらゆる、ほんと感動的なことがあってね、さっきの「ファウスト」の中で、そのときに、おなかに赤ちゃんがおる人が来たわけですよ。で、「ファウスト」って、言語の最も優れたものって世界で言われています。それで、市長さんちが世界銀行において、ドイツにもおったんですね。ですからその娘さん、高校行っている娘さんはドイツ語が読めるわけ。それで、原語の部分を読んでくれたというわけ。そしたら、原語を読むときだけその赤ちゃんが、足をけんけん蹴るんだって。それで、訳したものの時には蹴らんちゅうの。笑ったなあ、あれには。だから、言語っていうものは、あのなんだっけ、チョムスキーっていう人、もう一つ一派と、昔からあるのと、後に影響受けるっていうのと、あるの、いい例じゃない？そのリズムなのかなあ？とかさ、すごいおもしろいの。それで、たとえばシェークスピアも言葉の魔術師って言われてるじゃない、で、シェークスピアやっていると、子どもを二人連れてきた人がおったわけ。そしたら、その二人の子どもは小さい子と、これくらいとこれくらいの子がうろうろうろしてるの。で、みんなで順番に読みあってるじゃん。そのうちにこうやって座っちゃって、気がついたら。こうやって聞いているんですよ。だから、その、なんていうのかな、やっぱり言葉のすごさって言われてるものって、そういう意味。シェークスピアは日本語でもあんな風に伝わるのかな、とかさ。その、「ファウスト」の場合は、赤ちゃんが蹴るっていうのは、すごい。それでね、転勤してっちゃったんですが、転勤する時に、その、「ファウスト坊や」って言って、名づけてさ、坊やが出てきて、ぜひ委員長に見せていきたいって、転勤する、もう行く出発のときに寄ってくれて、写真撮ったもんな。あの、ファウスト坊やの写真。蹴ったファウスト坊やの写真。何べんも試してみたの。そしたらほんとに蹴って、日本語になると蹴らないんですよ。例えばそういうような話から、ありとあらゆる、やっぱり言葉とか思考でしょ、読書って、生き方を扱うものだから。そうになると、一週間って言ったけど、一年くらいしゃべり続けられるよ、私、とか言って。ほんとは無口な人なんだけど、って言うとも誰も信用しないんだけど、だってしゃべらないと伝わらないから、どのようにして、しゃべって伝えるかっていうことを結構すごい勉強したわけ。だって主婦の普通の人たちに、一緒にこういう仕事やるためには、こういうことだって固めては、みんなの共通見解にするためには、ものすごいむずかしい。ほんとは無口で、引っ込み思案なん

だけど、ほんとにうちの人知ってるけど。そういう引きこもりの人が、やっぱりしゃべらないと伝わらない中で、訓練されてきて、伝わる。委員長が解説してくれて、ようやくわかったって言って、運営委員会でも難しい先生の話聞いた後に、みんなが言ってくれるようになって。ところが最初に、今これ重要なことなんですけど、運営委員にぼんと入ってくるでしょ、そうすると、みんな嫌になるんです、胸が苦しいって。もうね、委員長の吉田節が気持ち悪いって言うんです。なぜかっていうと、真実を追究している、それで、誰にでもわかる言葉を追求して、固めて言うようにしとると、世間ではそんなことの中には生きてないから、こうなんていうか、辛すぎる、痛すぎる、っていうの。みんなの法則、私だんだんわかってきたから落ち着いてるけど、最初、困ったなあ、あんなすごい人があんなこと言ってるってこういう感じで、で、見ると、人によってはもう、あつというまに、婦人文庫でなければ生きていけないっていう人から、それから3年くらいかかった人もいる。そうやって治まっていくの。だから、読書って何っていうことですよ。あの、思想信条、趣味思考、全部超えたもので一緒にやっていくのが、本のグループでしょ。読書会っていうと趣味思考でやれるけど、もう一つ言っておくとこの地区で源氏物語の読書会が一番多いんです。たぶん十ぐらいあると思います。まだ今私達つかんでるのは六つですけど、十ぐらいあると思います。それは何だろうって言うことになりますけど、そういうのは、源氏やりたいから、行くわけじゃん。だけど、婦人文庫みたいのとか図書館の運動っていうと、全部超えた本っていうことで集まるわけでしょ。この難しさが今長野県下にこういうグループなくなっちゃっている原因だと思います。だから私達こういう仕事やったから、残ってる。今度は逆にひるめていかないと、もう難しいんですよ、実は。読書ってどういものかっていう研究機関もないし、ないから意味がわからない。そうすると、私達のグループは、まず思想で言いますと、共産党の議員から、今民主党だけどまあ言ってみれば保守党の後援会の一番の婦人後援の責任者から、社会党の後援会の責任者もいるんですよ、そういう人から、だから、例えば私の場合は、どういう社会的な政治的考えを持つかっていうのは若い頃は左翼的に誰でも思うけど、今どうしていいかわからないっていう試行錯誤で苦しんでいるとき。そういう人からありとあらゆる人がいる。で、今度は宗教。宗教は、お寺の大黒様から、大黒様ってわかる？あの大きい黒の様っていうんですけど、お寺の奥さんのこと大黒様っていうんですけど、あら、木下さんからもう死語なの、もう！！大黒様って、まあ！読書会っていうのも、言っときますけど、読書会って死語ですよ、若い人に。みなさん、知ってた？

宮崎：授業で松川の読書会を取り上げたので。

吉田：ああ、それで知っとる？だって、信金へね、この編纂の仕事の通帳つくりに行ったんです、信用金庫へ。そしたら、30前後の若い人じゃないよ、まあ私達にしたら若いけど、聡明そうな女

の人が、読書会編集何々って項目立てたら、今銀行っているいろいろ難しいらしくて調べとかにやならなくて、「読書会っていうものは、どのようなものでしょうか」っていうもんで、腰が抜けちゃって、もうやたらただ手続きに行ったのに、そんなところで説明しなきゃならんさ。それで、大騒ぎで帰ってきて言ったの。そしたら 40 代の若い、私達には若い副委員長が、「委員長言ったでしょ、読書会なんて死語だって！」って言われまして、へえ！ってなりましたけど。大黒様も、便所も死語ですけど。

そういうわけで、宗教のほうも、キリスト教からね、もうありとあらゆる人がいます。そういうのを超えてこういう仕事をやっているっていうということは、そういうことをきちっとこちらがつかまないと。つかんだからやれるんですね、今は。最初はわかんないよ、最初はもうふにゃ一っとして、何か趣味的かなあって私もそんな風に思っていたんですが、どうもそうじゃないっていうのがわかって、つかんだから、気をつけるじゃない。偏向しないっていうか、真理を追究することって、実は難しいもの、大事なものであり、難しいものであるということがわかります。で、たまたま一年前の 1 月、夫が末期の肺がんでね、今だからここ仕事やってないんです。今日ね来たら、煤が入っているような、一応皆さん来たら悪いと思って拭いていたんですが、その時に婦人文庫のみなさんが、いろいろね、押んでくれたんだって。キリスト教では、病気が治るっていう祈りがあるんだって。そこへ名前を入れると、ある日突然元気よくなる、毎日般若心経を唱えたりだとか、ある人は創価学会で南妙法蓮華教を唱えたりだとか言って、もうこうやって言ってくれるんです。ありがたいけど、神と仏と争って治らなかつたらどうしようと思ったけど、あんな元気になりましたけど、おかげさまで。そういう笑い話が出るくらい、ありとあらゆる人がまとまって、本ということで一生懸命やれるように、そのためには本というのが、読書ってなになんかっていうものが、この仕事で辿りついたからやれるのかなって思ってます。だから、長野県でももうほとんどなくなっちゃいました、こういう団体。PTA 母親文庫って配本やるグループももうつぶれちゃってまして、それで、ほとんど読み聞かせグループになっちゃってるの。で、読み聞かせはいいけど、自分たちの読書はどうなの？って言いたいわけ。自分達の読書って死ぬまででしょ？それをやりながら、何をメッセージとして伝えていくかってことがなければ、それがあつたから、中学行ったときもみなさんが開いてくださったし、だから、何々して“あげる”って感じじゃない？今あの読み聞かせ。だから、読み聞かせする人たちも自分のために読書して、永遠だから、辿りついた中でいいけど、自分は何を伝えたいのかって心に持ちながら読まない、だめだと思うんですが、そんなこと言ったら袋叩きにあいそうだから、言わないけど。だからでも、みんな辿りついてるんです、その読み聞かせっていうのに対してね。そこまでやって、やっとなるところないの、技術論になっちゃって、今はもう、読書推進協議会、読進協ってあるじゃない、私達が賞とった。あの通知見とつても、ほとんど、読み聞かせのグループばかりですよ。こういう読書のものはない。つぶれてきちゃってるんですよ。学校の教育でつぶれるから、

読書がつぶれとる。そうすると、今あまりにつぶれちゃってるので、大学の先生や私達が今、河合隼雄さんから、あの、有名な人たちを毎年図書館祭りで呼ぶんですよ。そうすると、みんな言うのが、大学へ、みなさんは読んでと思うけど、大学へ来るのに受験なんかせんでもいい、本だけ読める子どもを作って大学へ送り込んでくれないと、読み取れんって言うんですよ。去年は、藤原正彦さん、数学者。数学だって読書だと。それで、読書しないもんで数学の設問も読み取れんのだって。数学も想像力なのに、本読んでこないから、もうどうにも、あの人お茶の水ですけど、すごい静かな人ですけども、どうにもならないって言うんです。みんな来る先生、来る先生そういう話。ですからみなさんはそんなことはありませんね。

あとちょっと質問聞いて、はい。

宮崎：もうちょっとだけいいですか。感想と質問を学生のほうからそれぞれ時間いただいて言わせていただきたいと思うんですけども、その前に一点だけね、私のほうから。同じ内容なんですけれどもね、読書会運動をやっていた人たち、苦勞して本を読んだ今の高齢者の人たちは、本を読んで学ばってということと、その後の生き方、農村の主婦として生きるっていう、そことはどんな風にして結びついていったのか。学ぶことと生きること、その後の人生がどんな風に結びついていったのか、たぶんその聞き書きの資料を拝見すればわかるんでしょうけれども、そのことが一つ、どんなふうにみなさん感じておられるかっていうことです。それはたぶん、みなさんにも同じことが言えて、聞き書きをするなかで、いろんな人たちの人生に触れて、あるいは読書をするなかでいろんな人生に触れて、生き方を考えるっていうことをまさにやっていたらと思うんですけども、そのことと、自分が今あるいはこれからどうやって生きるのかっていう、その現実のこの飯田の世界のなかで、飯伊地区のなかで生きていくってことがどんなふうに関わりついていくのか、そのあたりについて、もう少し簡単に補足していただければと思うんですけども。

吉田：簡単に言うと、ものの考え方が、見えないものが見えるっていうことは、事実をひとつね、たとえば、一つの事実があるとするじゃない。結構婦人文庫の中にもそういう人がおるから、いろんな揉め事とか、図書館祭りの仕事なんてやると、婦人文庫じゃない人達と一緒にやりますよね、いろいろ。そうすると、やっぱりね、一つの事実を捉えるのに、ありとあらゆる考え方があって、なかなかうまくいかないんですよ。今言うように読書っていうと、簡単そうなんですけど、そういう人たちが集まったところだから、実はすごく難しいんですね。そうすると、一つに事実を私達は当たり前だと思う事実が、勉強していないとその事実まで辿りつけないわけですね。そうすると、もう自分達はわかっていると思って、固まっちゃってるから、他の団体の人たちは。そうするともう、ほとんどうまくいかなくて、すごい苦しんでいるんですけど、その図書館運動

の仕事までも私達を中心になってやって、他の団体もまとめたんですが、ある程度まできて一歩進めるときにものすごい苦しんでいるんですね。そこで見えるのは、私達は一応婦人文庫の人たちの中核は、最初からそうじゃないんですよ、今はほぼ一致して、一つのことが見れるようになるわけね、図書館運動の捉え方も。で、他の団体の人見ると、捉えられないっていうのを見たときに、普通の、それこそ普通のおばさんたちが（ここで録音が中断している）。

杉山：杉山と申します。3年生じゃなくて大学院生なんですけれども。えっともう、胸いっぱいです。高校生のお話で一点伺いたいというか、すごい大事だなというふうに思いながら聞いていた点があるんですけれども、まず一つ質問なんですけれども、高校生たちと一緒にやることになったっていうのは、みなさんの方から高校生に働きかけたのか、それとも、別の何らかの手段だったのか。

吉田：もちろん、こちらから働きかけなきゃそんなものはできません。そのね、高陵中学へ、行った時の子供達と、

木下：僕の子どもが行った中学校でPTAの会長やってるときに、吉田さんがうちの学校来て、6クラスだったかな、全部のクラスに3人ずつ配置してくれて、同時の授業をやってくれたときに、

吉田：それで、あの、簡単に言うと、去年ね、人権年にちなんで文化会館が、『破戒』のモデルがこの地方なんです。

宮崎：『破戒』っていうのは島崎藤村の？

吉田：島崎藤村の。ああ、そういうのもだんだん死語ね、みんな知らないんだ。それを取り込むということで、文化会館の館長が、それもねやっぱり木下さんのように私達と共鳴しているもので、一緒に連動して何かやらないかと。もうやだなあと思ってね、自分達でやってるだけでも忙しいのに、そんなもんで、やだやだって言ってたんだけど、なんか新しいことができたらやるって答えておったけど、まあ熱心でね、図書館まで来るんですよ。そんなもんで、何かやらなきゃと思って、それじゃ、『破戒』の読書会なんかさんざんこの地方やるもんで、藤村この地方の人ですから、それじゃ高校生とでもできたらやる、なんて言ってやたら答えちゃったの。それで、そうしたらあまりに熱心に詰め寄られるもんで、しょうがないな、やらなきゃということになってしまって、高陵中学とか竜峡中学とかで知り合った子供達、あの中学生の読書会やってるでしょ、

知り合った子供達に話をして、そしてそれを核にして、一応各高校回ったんです。そしたら、門前払いですよ。丁重に校長が会ったりまでするところもあるけど、丁重に今時そんな子どもが読書するとは思えませんって言うんで、ま、丁重に門前払い。そっちからはどうにもならない。だから努力はしたんですよ、一応高校全部まわって。ですけど。結局私達と中学のときにつながって、やっぱりこういう子がおるんですよ、つながって。そういう子達に呼びかけて、基本的に10人くらい。だから各高校ですよ、飯田高校だけじゃなくて、各校の、農業高校から工業高校から。で、だんだん卒業したり、今は6人くらいですけど、そういうことです。きっかけは、絶対子どもとか、学校からではありません。もうほんと、絶対っていうくらい。門前払いです。はい、以上です。

杉山：ありがとうございました。

千田：私は学部で3年生の千田です。今日はすごいありがとうございました。今までゼミで、勉強してきたのは、やっぱり紙で見る事例だったので、実際に活動されている方のお話を聞けてすごくおもしろかったです。来年で50周年？っていうお話だったんですけど、他の読書会がつぶれたり、読み聞かせの会にかわるっていうのは、それは、読み聞かせの会っていうのがそこまでたぶん深まっていないというか、まだちょっと今こういう読書会で活動されているのよりは、たぶん、その人たちなりに苦労はあるかもしれないんですけど、どちらかっていうと緩めの活動になってると思うんですけど、ここの飯伊婦人文庫では、読書会がこれまで続けてきたっていう原動力みたいなものは、やっぱりそういう一個一個の事例に出会ったときに受ける感動とか、そういうものなんですか。

吉田：ねえ、ちょっと今それを調べてるんですけど。だけどねえ、言えることは飯田地方はすごい土壌があるということです。歴史の土壌が厚ければ厚いほど、その影響は大きい。それで、単発、単純的に出ないの。何ていうんだろう、豊穰なかたちで、いろんな形で出るから。そうすると、一箇所だけでね、いろんな形で出るから、何かが残るとか。残る、私達みたいのが残るでしょ、残った人がそういう歴史調べると、その豊穰な、豊穰っていつてもたぶん今は死語だと思うけど、学者は使うかもしれないけど。豊かってことですが、そういうものを、歴史があると学んでけるじゃない。全部学んで今やってますけど、この地方じゃなきゃできないよねってよく学者の先生たち言われますね。地方じゃなくたって、いいもの、読書ってそういうものだからやれると思うけど、私達みたいな普通の人がこんなに生き生きとできるには、やっぱり歴史にすごい感謝してるし、私達、だからそうなるまでやるっていうのもあるの、私達しかできない、こういうのまとめないとまずいんじゃないって結構プレッシャーかけるんですよ、学者の先生方。社会教

育っていうとだいたい公民館活動だから、結構この辺にかかっているわけよ。

木下：簡単にはかえってこないの。

吉田：そうすると PTA 会長来年なるのよって、高陵中にも僕の息子がおるんで来てもらいたいなあと、というつながり。だからそういうのをさぼると、だめなんですね。なんで、そういうのが、私は今委員長だからべらべらしゃべるとるけど、みんながみんなそうやって網のようにこう広がっていくということですが、これが難しい。

木下：100 年先を見て、今の自分を知るっていう。

吉田：それをやってるんです、そうです。

木下：100 年前から。今やってる 100 年後を見て社会教育のありかたを考えるとということ。

吉田：100 年前で感動して、今問題意識の原点そこじゃん。ほんとは人に言うときも、これ書く時も、「あんた 100 年後に残るんだよ」とかさ、いろいろそういうこと言われるといわれないうの全然違うじゃん。それをあんまりね、気取って文章がうまいだけの人なんて、私達ずっと調べてきてもそれじゃだめなの。中身が、中身っていうのか、自分の信条がどう伝わっているのかっていうもので資料になってくるのやっぱり。だからあんまり苦しめないで、そのまま書いてくれりゃいいとかさ。自分が下手でも言えるもので、それで何とかこれ保っているわけね。今たった 200 人なんですけど、たったって言っても、200 人保つのにえらい仕事ですよ。もう組織を全部ゼロと思ってい、婦人会の組織はゼロです。その中で 200 人を保っていくための一つの方法でもあるんです、この今の仕事。求心力になる、偉い人がおって、こう引っ張っていくことができないから。そうするとこの仕事で求心力を持たせていかなければならない。それでみんな働くんです。今の読書会の聞き書きでもね、結局もうやめていった人たちが、一人二人三人で十人くらいかな、こうやって入ってくれて、やめとった読書会が再生したところがあるんです。なので、今度の明日行くところもそうなるといいかなあと思ってるんですけど。あの、藤村読書会の約 28 年、30 年続いたところが、再生して始めます。そういうところとか、全てそういうものにつながるから、これをやるとるんです。歴史研究者じゃないから、そういうためだけにやるとるんじゃなくて、婦人文庫の読書運動の活性化につながる以外はやりません。それだって、つながるのが見え見えで、見えてきとるからやる、頑張ってる仕事です。

根深：教育学部3年の根深です。よろしくおねがいします。まず感想なんですけど、皆さんのお話を今日聞いていて、僕が言うのも何なんですけども、みなさんこう、話したい、聞いてもらいたってというのがすごく伝わってきまして、そういう点だけで言うならば、これもまた聞き書きであると。またみなさんも90歳の先輩方の聞き書きをしてこられたということで、聞き書きってというのはそうやってつながっていくものなのかな、というふうに、連鎖的につながっていくものなのかなっていうふうに、この時間聞いていて思いました。そうですね、えっと質問のほうをちょっと、広がるっていう点で後継者とかについて質問しようと思ったんですけども、先ほどの100年後を見据えた活動だっているというので、この点は今は心配することでもないのかなっていうふうに自分なりに答えが。

吉田：心配してますよー。

根深：なんか100年後、ま、僕もいませんけど、まあ、何とかなってるんじゃないかなあって思いました。今日はありがとうございました。

吉田：おかげでね、他の団体と違って一人二人と、20代もおるし、30代、40代、50代もおると思うけど、うわっとはもう無理ですよ。だからこういう仕事に感動してやっぱり一人二人です。で、こういう場所がないから来るとやっぱり開放される。心が開放っていうのね。こんな場所はない、世の中にとって言って来ます。

玉手：教育学部3年生の玉手と申します。今日はありがとうございました。読書というものは自分の中ではひとりでするもので、ひとりで教わって終わるものだと思っていたので、今日聞いていて読書をすることで、すごい学んでいるんだなあと思ってすごい感動したんです。高校生と読書会をなさったって話が出たんですけど、そこでゲーテのファウストを読んだっていうのを聞いて、私も読んだことがないんですけど、私は何か雑誌とか漫画とか、そういう最近流行っているようなやつしか読んだことがないんですけど、高校生とそういうゲーテを読もうと思ったのはどうしてですか。

吉田：あのね、斉藤孝って先生今有名でテレビにも出てるけど、あの先生もほんとにはコミュニケーション学の人なんですけど、明治大学で学生に会ったら本読んでどうにもならない、研究もできない、そしたらなぜだろうって言って、それで自分が斉藤メソッドって言って本の読めるような研究して、本を出し始めたような人なんです。それでその人が、すごい、そういう人いないから、すごい先生の本で、「読書力」とかね、いろいろ参考にさせてもらってるんですけど、その先生

がもし自分だったら、今の国語だめじゃない？国語の教科書。こういうの出すって「理想の国語の教科書」っていうのは年に一冊ずつ出している。それを教科書にしたんです。そうすると名文といわれる大事なものがそこにいっぱい入ってる。とにかく子どもにはわかってもらわなくても大事な世界、日本から世界の名文をこの中に入れにゃあ、頭はそれでできるんだからという発想で。だからゲーテのファウストも一回載っとするんです。そうすると、一回載っとするのをやるためには私達は、ある程度ちょっと調べて、「この最初の導入は」とか言ってコピーしてきて読み合わせしようとか言ってやるわけ、すべてのものに。今度今は「旧約聖書」。こないだ一回だけ、あの、一回で終われんの。二度で。「旧約聖書」すごいおもしろいです。大人だっとな読んだことなく、あんなこわいものだと思ってませんでしたって私らの先輩が言うくらい、知らないんですよ。だけど、「旧約聖書」知らなかったら、今の世界の四分の三の文化わかんないじゃん。だって、「旧約聖書」でユダヤ教もイスラム教もキリスト教も、旧約聖書のもとですよ。あとそこからしてる人たちで、今の戦争も起こるとし、文化もあるわけじゃん。だからそういつてのせるわけですよ、斉藤先生。そうすると私達がそれを機会に前後左右全部コピーしてきて、一緒に読むわけね。自分の勉強もあるからちょっと調べてね。そうしないと子供達って開かれない、その先生が載せたこんな文章だけだったら開かれないから、だからせっかくだもんで、自分達もその機会にっていうことでコピー。必死ですよ、コピー料なんてすごいんですよ。そうすると結局、後にはみんな本買います。いいものはね。私達も買いなおすし、そういうことです。で、何も「ファウスト」読みたかったわけじゃないの、やだなあーって、変なものやらなきゃならないって、私なんかリーダーだから勉強せんならんに、もうやったことないものじゃん、えらいものに出会ったなあって。おかげでね、出会いました、子ども達とかに。そういうことです。たまたま仕方なく。だからみんなで読む意味ですね。もし私だけがすごい本好きな人ですけど、読んでたら全然違う、自分の分野だけだったのが、広がるっていうことですね。自分じゃない分野も勉強でき、一緒に読めるから、ものの見方も思考もそれから刺激もいただけたかな、そういうことです。「源氏」も今度の聞き書きでとりあげるのは、大嫌いだから嫌だけど、やらなければならない。

木下：プレイボーイの話だからなあ。

吉田：そうなの。でも嫌いな人はみんなねえ、プレイボーイだから、源氏が、いやって。私もそんな女たらしの話をなんで勉強するんだって、そういう人おったよ。みんなおって、それでもみんなやりだしたらはまってくるの。だって千年も日本の名作、世界の名作って言われるものに意味があるんですよ。でも私好きになれないけど。好みがあってもいいんだけど、接することが大事。そうすると全然知らないような、自分の国のね、だってみなさん、ヨーロッパ行ったら言われますよ。源氏を。知らんまま恥ずかしくて行けない。今私の教え子がロンドン行ってまして、

私に言われた通りだと、向こうの人たち威張るのに、こっちは日本のもの持って行って太刀打ちして威張るしかないのに、知らないって言うんですよ。ほら、って言ってますけど。はい。話せばいくらでも出てくる。

榊：院生の榊といいます。よろしくおねがいします。「読書が人間を人間にする」と言うところに一番感動しました。特に重要と思われたのは、読むこと・書くこと・話すことっていう一連の流れが、自分の根幹になるのかなっていうふうに、感想を持ちました。女性の歴史は女性でしか書けないってようなお話、そして書かなければ、書き残さなければ女性の歴史が残っていかないというような、ご指摘が重要だと思ったんですけれども、ご自身のお仕事をほかの方が聞き書きされるようなご予定はありましたか？たとえば吉田さんのことをどなたかが聞き書きされるってような、逆の立場っていうふうなことは。

吉田：前ね、社会教育の学会の先生たち来たときに、今言ったように、そんなこと思っというて、自分たちのこと、大学にいないから聞きたいって二度もね、ポイして、こっち側に取り込んでやって。だけどもしよろしければぜひ、またみんな。

武田：今、長野市の清泉女子短大に勤めているんですけども。私は障害児の母親の調査、聞き書きを中心にさせてもらった過去があるんですけども、その人たちもやっぱり、通じるというかな、本質的に同じだなあと思う部分が一点あって、それは心の解放っていうのが一つだし、それからあと、自分の人生を語ることが、結局、他者、あるいはもっと広がって、私なんかも通信読ませてもらってるんですけど、なんか心が洗われるんですよ。四半期に一度来るんですけど、そこでやっぱり共鳴するものがすごくあって、普遍性を放つんですよ。だからもう煮詰まってるというか、今ものすごくね、何年たっても話し続ける。そうすると、すごく物事が捉えられるような、自分の子育てが、みんな語るのが自分のつらい子育てで、語るだけなんだけど、それが子育てをしたことのない私にも響く何かをもっているんですね。そのへんっていうのを、どういう風に捉えたらいいのかなっていうふうに。普遍性っていうこと、抽象的なことじゃなくて、実感としてどういうふうに。どういうことなんですか？一致して物事を捉えられるようになるっていう部分は、そうなんだと思うんだけど、なんかちょっと。

吉田：一人ひとりね、たぶんね、私達は法則的に普遍的なものを、捉えて、意味づけて、本にしたりしますよね。そして、思考を言葉にして伝えていくという仕事をしてますが、個々はみんな違います。誰かの言った何々で、自分がどう開かれたとか、ものすごく具体的です。そうです、人と人と。あの、例えば今の読書会でも、みんなが何人かで聞きに行きますよね。感動した

場所が違う。だけど、私の立場だと、全体でこう、その読書会が他の読書会とどう違って、どこが特徴があるのかっていう、比較読書会学みたいなの、そういう考察していかないと、本としてまとまっていかない。だから、そういう仕事やっているもので今こういうしゃべりかたになりますが、個として、私自身も学ぶところはまたある言葉なんです。で、みなさんも言っとること聞いとるとそうです。ね、そういうことだよ。自分の開かれるところは違います。団体としてみつめてくると、個として開かれるところと違うものでみんなおもしろい。だってロボットがやるとるんじゃないもんね。それでみんながすごい、生き生きと感動しながら、結構辛いことをやっていける。体の欠陥持ったり、介護しとったり、ここも 90 の介護しとったり、みんなね、それぞれで、そういう人が中心だから、若い人も入っちゃくれとるけど、働いてるもので。でも一生懸命その人たちを吸収していこうと。やとるんですが、どうしても中核は退職後、という形になるでしょ。働いてた場合は。働かんでも、ある程度は夫も退職して、子どもも巣立ってって人たちになるでしょ。すると今度は体の問題が出てくるの。なのでなかなかね、大変な中でみんなが生き生きできるのはそういうことなの。

武田：自分の人生を語りあってもそういうことになるんですか。本人中心に、本人の解釈というか。

吉田：ああ、あんまりね、人生全般になるとまずいですよ。さっき言う、その、最初はそうなのね。

武田：語りたくなっちゃうということですか。

吉田：そう、それで、例えば、今は違うけど最初の頃なんかは、私がいないと、あとほとんど普通の婦人会の文化部で来た人たちのかたちの、パターンが一緒じゃない。普通の穏便な家庭で、それで子どもがおって、そんなに苦しい生き方してきた人なんか、そんなとこ来ないの。幹部として。だから、パターン化しているんです。そういう人たちが、私がいるとちょっと違うもので、いろいろ今のようにしようとするんですけど、最初の頃の話だよ。そうすると、おばさんたちの井戸端会議になる。そうやって生きてきた人たちは素敵なんだけど、穏便に生きてきているから、ものが見えない。で、世間様になっちゃって、そうじゃない人たたいり、いろいろあるんです。それをだんだん、違うよ、違うよ、違うよっていうことを言ったってわからなかったのが、『つながり』で完璧にわかったんだよな。百人百通りなんだっていう、そのこと。それは他者を思いやるというか、違うんだってわかったら、ぶつかってやればいいんだ。そこからしないと、違う人が集まった活動ですから。そういうことです。だけど、ある種のところで共通見解にきとるで、

本という真実とかそういうところでは、いつまでも隅っこで読んで、という感じはありますね。だけど、ちょっとやっぱり、人の非難とか、私達と共通見解じゃない人と非難し合って、苦しい思いしてるから。他の考えを出してくって大変なことなんです。みんなで、「ねえ！」とか「何でだろう」とかいいながら、表には出さない、行く時はちゃんとして行くんですが、そういうようなことはあるけれど。考えかたでやるのはちょっとまずいです。結婚して普通の人、結婚したことない人、子供のいる人いない人、離婚した人しない人、職業だってありとあらゆる貧しさからいろいろ。だけど、婦人文庫に来ると、お金持ちでも何でも関係ない。ね。私の母も婦人会長やった人ですけど、母が婦人会長やるその前の先輩くらいまでから、普通の人が婦人会長だったの。その前って言うと、名家の人が婦人会長だったの。なので、うちの母の前が母の師範の先輩がなったときには、ものすごい、何であんな、ひどい言い方だけど、忘れてしまったけど、一介のサラリーマンの人がなんで婦人会長やるんだ、ってそういう時代はありましたよ。なんとなく引きずってるところは十年くらい前まではありましたが、私達がこの仕事してからは、ありますけど、若い人入ってきてくれない。違う人入ってきてくれない。今はもう完璧に違います。しなきゃ、いろんな人、若い人があの団体に行って、うちでは姑さんに苦勞して、また婦人文庫でお姑さんに苦勞したくないわけ。今でもそういう人おるんだって、そんな若いのに。そういうところ読書会でやればいいと思うんです。読書会っていうと、ある程度、それでも違うんですよ。みんな違うし、こないだ行ったところでは、昔で言ったら小作から庄屋系の人から、先生の奥さんから、ありとあらゆる人が30年続いてきて、すごい親しい場所になってきてるんですよ。だから、読書会で何十年たつとそういう場所になるかもしれない。全部超えて分かり合って、それで、そこでは、みんな言うんだけど、楽しくてって。あそこは楽しくて楽しくてってこういうふうにみんなに言うてもらうと、言うんです。ですけど、あの山の中のあの村で、あの職業が違って、たぶん、聞いててわかるんですよ、30年でみんなこうやって語っているから。あんなに仲良くなるものだろうか。だからそれはわきまえてると思います。みんな言い出すと違うんじゃない？もうおかしいんだよ、驚いちゃった。「せーの、は！」って言ってみんなで全員で読むんですよ。それをいつのまにかこんなにあるんですよ、まだ残ってるんですけど。もう10年かかるとか言って、もうすっかり悲観してるので、何言ってるの、90まで十何年もある、大丈夫？って言ったら、それだけでもみんな明くなっちゃって、それはいいんですけど。どれ言いたいんじゃないけど。読書会もいわゆる、誰かがリードするんじゃなくて、「せーの」って言って「わーっ」って読むんですよ。そんで読み終わったら、さあお茶飲もう。最初の頃はまだ感想言ったらしいんですよ。今は「わーっ」って読んで、「はい、お茶」って言って。お茶なんですよ。お茶が楽しくて。ほんであとは、旅行も行くんですけど。そういう、今の答えはそうなるかな。読書会ですらでも、いろんな人がおるから、それでも何年も経つとそういう場所ができてくるということが今度の聞き書きでわかった。だから、何十年単位だな。何十年経たないとだめ。だからね、90

になる先輩達みんなそうよ。お前さんたち若い、私達も若いけど、私達は 90 になるまでにもう 30 年くらいあるじゃない。だから、お前さんたち若いときからやっておかないとだめだよって。急に寂しくなってやろうと思ったってできないと言いますし、90 になった違う先輩が、みんな死んじゃっていないんですよ。「寂しいけど、いまさらできない」って。「何言ってるの、奥村さん、これだけの人だったら集まるもの、私集めてやるもの」って言うくらい素敵な人なんだけど。そうね、若いときから何十年です。多いところは 50 年。ま、20 年になるとある種、発酵してきませんが、だいたい 30 年いりますね。読書と同じだと思います。今村さんのような人はしきりに 30 年と言ったの。30 年たたと読書は意味をなさない。発酵しない。っていうのは、何々って言ったことを覚えて使うとか、そういうことじゃないってことです。脳科学でやると、長期記憶とか、短期記憶とかあるじゃない、あの長期記憶のところへどれだけぶちこむかってことなんです。それが想像力っていうものがつくときの、今脳科学が発達してわかっているんですが、読書だけをもにやっとならば 30 年って言われましたよ。私だからね、名古屋から来て読書が好きだから婦人文庫へ、まだ仕事が忙しい時期だけど、月一回だけ行って、今村さんの話聞いたときおかしい人だと思いましたよ。だって読書っていう問題を何も知らない、名古屋にないもん。来てね、なんかもにやもにや、接してるうちにわかるかもしれないけど、30 年経たないと効き目がないなんて人、初めて聞いてみな。おかしな人だなどと思いましたよ、最初。口癖だったの。ほんでそのうちに、今村兼義さん神様になっちゃって、普通の知らん人たちに神様って変でしょ？ 私達の神様なんです。それくらいいろいろつまつたんです、私達にとっては。だから、あ、読書会も 30 年なんだなどと思いました、このごろ。ね、20 年ちょっと若いね。聞いてきても発酵力が、ね。

久保田：だから、93 歳の伊藤さんがセカチュウ読もうって言っても興味示すんですね、読みましようって。

吉田：93 歳の木曜読書会の人なんですけど、セカチュウ読み終えて、少年H読み終えて、今、藤原正彦先生去年やったな、数学の。それで刺激受けて、先生のやって、それも輪読やっとならばですけど。もっと昔は難しいのやってたんだよな。だけど今は、若い人の読みたいって言って。それもな、80 前後から、普通のインテリといわれる人たちに聞くと、もうそれくらいになると、新しい本は読む 1 行から薄れていくって聞いていました。ところが、読書会の聞き書きやって、ああ、みんなでやればそれもできるんだって。楽しんで、セカチュウですよ。それで、行って一緒にお茶飲んでる時なんか、生き生きと恋愛を語ったり。最初聞き書きいったときは、イラクがどうのこうのっていう時だったから、こんなんになって怒ってるんですよ。私達のほうがなんかもうあきらめちゃって、まずいんだけど、まあ、とか思ってるじゃん。もう生き生きと怒ってるんで

すよ。アメリカのやることおかしいって言って。そして、鋭い。私達よりも勉強してて、鋭い。それをお茶飲みながら、こうやって。それで、この間も行ったら、若い人たち来たわって。私達若い人たちなんです。セカチュウのとき感動したなあ？世界の中心で愛を叫ぶってね。

久保田：そして世界情勢を語るのね、それ読んで。

吉田：愛についても生き生きしてね。みなさんたちよりもまだ私達のほうが生き生きしてる、だから韓国ドラマしか見ない。だって、愛を健康的に描いてない、きりきりするじゃない？日本のって。韓国ドラマって健康ですよ、愛について。男がいいしさ、とか言って。そういう感じの語りをセカチュウでやるわけ。だから読むというより、そういう幸せを。90いくつでそんな幸せがあるなんて思わなかったじゃん。

塩沢：そして、すごくおしゃれしてくるの。ね。おしゃれしてくるのが一つの出てくる楽しみね。

吉田：ものすごいおしゃれでね、普通の私達がいうおしゃれじゃなくて。私たちなんかズックはいてるの、転ぶと痛いと思うじゃない、私。それがこんなのはいてな、ほんでね、今度は違う人でベレー帽かぶってね、93歳の人をすごく憧れて、ブーツなんかびっくりする、こんなブーツですよ。私も持ってるけど、若いときの捨てがたくて。転んじゃうよ、飯田ではいたら。マスターが言うには、一級の日本で通用するおしゃれ。素敵、奥村さん。

塩沢：この前毛利さんだってな、きらきらきらきらしたもの着た人もおって、誰だかと思ったら、90何歳の方だったんだよね。

吉田：ほんで髪の毛もな、染め方。ここに紫の一本入れる染め方あるじゃん。私なんて、もう切って染めて、ズックはいて、こうやって。反省させられました。まだ色気持たなきやならんなあと思って。もう30年後あんなふうになれないわって感じで。そういうふうにさっき先生に言われた答えも、いろいろいっぱい現れてくると思います。そういうのを実証できるのが、この地方のここではない。そういうこと。だから急いでいるというか、私達が。だからやれたかな。だって、研究者だって、こうやったらこうなるっていう見本がおらんじゃん。それがおるっていうことだなあ。人の実験なんてできんじゃんなあ？まして、90いくつの人おる？私感動しちゃってね。それが母達と同年代なんでね、みんな愛して見守ってくれて、苦しい時も支えてくれるんです。だからいろんな意味で。

武田：読書することも自分の支えになり、その仲間も支えに

吉田：そうです。

武田：その両方があったから、一人で読んでいたら。

吉田：もう読めません、読めないっていうの知ってるんです。その例はいっぱい知ってて、80前後からかなあ、新しいもの、昔から読んでるとか、ちゃんとわかってればいいんだけど、新しいものは1行読むと忘れていくなんていうのは、多くの人から私聞いていたんです。ほんなもので、読書会の聞き書きやりだして、そのフレッシュさ。

塩沢：明確に覚えてるよね。聞く人たちみんな、きちんと。

宮崎：刺激が強いとね、覚えるんですよ。新しい世界と出会って、世界が開かれていって、その刺激が強いとちゃんと覚えるんですよ。

塩沢：覚えてるね、すごい明確に覚えてる。

宮崎：では、木下さん、最後に。

木下：僕、8月5日に箱根で社会教育についてしゃべります。そのときもしよろしければ。

吉田：婦人文庫のは初めて聞いたよね？

木下：今のですか？今日のは初めてだな。婦人文庫の活動はちょこちょこっと、地域を作る話題のときにも先生にご紹介して書いてもらったりして、すごいことがありそうだなってことは、ちょこちょこっと確かになってきたんだけど、僕は1990年くらいから公民館主事という立場で、女性の生き方を考えるっていう講座をやったんですよ、8年続いたのかな。僕自身が、女性が勉強する、学ぶということ自体が社会の中で決められないということを初めて知って、すごいカルチャーショックで、今日の話も僕にとってはカルチャーショックなんだけど、もうちょっとで、深みにはまりそうだなあと。

吉田：はまってください。行政の人がはまってくれんなあ、図書館から今だって追い出されそ

うだもん。文庫室が何であるのかって。

木下：僕ね、本はすごく好きで、ゲーテの『ファウスト』も確か読んでいるし、シェークスピアもだいたい文庫本は読んで、ちょっと自己満足なんだけど、やっぱり人と、本を通して人と出会ってくことを感じました。

以上

飯伊婦人文庫に関する聞き取り調査について

宮 崎 隆 志

2006年の夏、学生たちとともに飯田市を訪れた。多くの社会教育研究者にとってそうであるように、私にとっても飯田・下伊那地域は「汲めども尽きせぬ泉」の一つである。2000年に竜丘公民館を訪れた頃の私は、社会教育について紋切り型の解釈しかできていなかった。公民館活動に関わる方々にお話を伺いひとまずのとりまとめはしたものの、その後、徐々に「勘所を外していただのではないか」との思いが頭をよぎるようになった。例えば、「リーダーは行き着く先を見通しつつも、学ぶ人の一歩先ではなく、半歩先に立たねばならない」という塩沢義男氏の言葉は、ゼミや授業で発達の最近接領域論や対人援助におけるモデル論に触れる度に、何度も噛みしめた。そして、そのような「境地」を生活の中に切り開いてきた飯田という地域に秘められた深甚の意味に比すると、私は自らの到達点の未熟さを痛切に感じざるを得なかった。

社会教育を学び始めた学生に、私には未だ伝えられないけれども、伝えるべき何かがある。だとしたら、学生たちが直接、飯田を訪れて教わるしかない。20歳の彼らが何かを感じとってくれることを願いながら、飯田に向かった。

学生たちとは、事前に鶴見和子の生活記録運動論を読んでいた。学生たちは自分と同世代あるいは年下の紡績女子労働者が書いた生活記録と鶴見の分析を並行して読み進める中で、人は人との関わりの中で育っていくことや生活課題を共有する仲間の意義を確信しつつも、ゼミを通して得られたそのような知見を、現代を生きる自分に即してどのように意味づければいいのか、多少戸惑っているように見えた。それは1960年代以後の生活記録運動の「停滞」現象をどのように評価すべきかという論点とも密接に関わっていた。

すなわち鶴見は、公害や戦争の記録のように、第三者が「ききとり書き」を行ったものも生活記録であり、その意味では1960年代以後も生活記録は発展していると主張しているのだが、鶴見のこの主張をめぐるには必ずしも共感的な理解にまでは至らなかった。やはり自分たちの世代とは断絶があるのではないかと、という疑念が払拭できなかったのではないかとと思われる。

そういう状況で、学生たちは飯伊婦人文庫の読書活動と聞き書き活動に出会った。吉田さんたちの活動の広がりや深さは、この記録にある通りである。その活動はまぎれもなく地域に生きた人々の生活を記録する学習運動であり、また仲間と読み、他者の話を聞くことが、書くことと同様に、自らを問い返す学びになっていることを証明するものであった。

実は私自身も、鶴見の論に対しては学生と似たような感想を持っていた。しかし、飯伊婦人文庫の活動に接して、鶴見が見ていた世界が僅かだが見えた気がした。そして、またもや自らの視

野の偏狭さを思い知らされた。

今回の飯田訪問では、幸いにも『母の歴史』の著者たちとお会いすることもできた。紙幅の都合で、その記録は次号に掲載させて頂く予定であるが、この出会いについても、飯伊婦人文庫の方々にご尽力を頂いた。そして、これらの出会いのすべてをコーディネートして下さったのが、飯田市の木下巨一氏であった。竜丘公民館の皆様からも公民館再編の状況の詳細にお話し頂いた。人形劇フェスティバルの初日という多忙な時期にも関わらず、学生のためにと協力して下さった皆様に、心より御礼を申し上げる。

ⁱ 飯伊婦人文庫の総合的な分析には、既に山梨あや氏が着手されている。「1960年代における読書運動」、日本社会教育学会紀要第49号、2006年。また、「聞き書き」の記録と分析は『つながり-聞き書き・女性70人の読書と人生と-』、飯伊婦人文庫、2002年にまとめられている。

なお、このような学習実践の持つ意味を考える場合に、末本誠氏らが着目されている沖縄の字誌づくりの分析は参考になる。小林文人・島袋正敏編『おきなわの社会教育』、エイデル研究所、2002年など。